國學院大學学術情報リポジトリ

“Age"Depicted in Tawada Youko's Kentoushi : Differences between Body and Recognition

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Anzai, Shinji メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000492

多和田葉子「献灯使」に描かれた〈老い〉

―身体と認識との差異―

安西晋二

一、文学のなかの〈老い〉

一〇〇歳以上の人口が七万人に届こうとしている現在の日本において、労働する高齢者は、すでに希有な存在とはいいがたい。メディアでは、長生きの秘訣や仕組みなどがたびたび特集され、世界有数の長寿国にふさわしい情報が巷間には溢れている。一方で、総務省統計局は、二〇五〇年までに日本の総人口は一億を下回るとの人口推計を出した。団塊世代の喪失をはじめとした、高齢者を含む大幅な人口減少は確実に近づいている。高齢者を対象としたビジネスも楽観視はできない。人口減少を視野に入れた少子高齢化という現状と、いかに向き合うかが問われているのである。

多和田葉子の「献灯使」（『群像』平成二六・八）は、このような日本の状況と密接しているといえるだろう。登場人物の義郎は、何らかの「汚染」の影響からか、「死を奪われた状態」にあり、一〇〇歳を越えてもなお健康な身体のもち主として描かれている。小学二年生ではあるが、食事や歩行、服の着替えすらも身体的に困難な曾孫の無名を、彼は養い、家事に勤しむ。環境の「汚染」により、諸外国との国交が途切れた日本は「鎖

国」化し、さらには東京などの都市部が過疎化するのに対して、沖縄・北海道へと人口が移入しているという「献灯使」の物語世界は、東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故とを始点とした、近未来的なディストピア[1]を連想させもしよう。

ただし、多和田葉子自身は、近未来的なイメージには否定的であった。多和田は、ロバート キャンベルとの対談で、義郎や無名らの身体的な特徴について、「年寄りは放射能に当たると死ななくなる、という設定になっています。もっと正確に言えば、本当にそうなのかは誰にもまだ最終的にはわからないという設定ですけれど」と「放射能」の影響を示唆し、「元気な年寄りが日本社会を支えていかざるを得ない。そういう社会構造はすでにあるわけで、そういう意味でも『献灯使』は未来小説じゃないんです[2]」と述べている。「元気な年寄りが日本社会を支えていかざるを得ない」という「社会構造」は、先に挙げた日本社会の現状に通じていよう。義郎をはじめとした高齢者たちは、無名らのような若い世代を、あるいは物語内における〝社会〟を支える中心的な構成員・労働力にほかならない。よって、「献灯使」は、高齢化社会の変奏を描いた文学作品として十分に機能していよう。

これまで、高齢者を題材とした文学作品では、〈老い〉によってもたらされる境地が、検討の対象となることが多かったのではないだろうか。たとえば、鈴木斌は、そのような日本文学における〈老い〉について、次のように説いている。

> 平均寿命が延びた今日、定年を迎えても精神や肉体はまだ若い。しかし、その日を境にそれまでの社会的地位は一挙に消滅し、同時に経済的な基盤も大幅に弱体化される。従来までの日本文学に描かれた〈老い〉はこの激変や病に苦悩し、それらを嘆いた作品が多い。
>
> しかし、最近はその流れと共に、老年によってもたらされた自由な立場と時間を生かした生活や、老年にならなければ見えてこない人生の真実を描いた作品が確実に増えている。この二様の文学の呼称は定着していないが「老人文学」と呼ぶべきであろう[3]。

鈴木の説く「老人文学」の特徴は、確かに〈老い〉ならではのテーマであろう。また、そこには、「すこやかに生きたいという生の願望よりも、周りに迷惑をかけるようならすみやかに死にたいという死への親和性。それが世界有数の「豊かさ」を誇る日本の長寿社会の現実ではないか[4]」と天野正子がいうような、

死の観念も関わるはずだ。医療技術が進歩し、平均寿命が延びようと、身体の衰えと死とは、〈老い〉と不可分である。

だが、「献灯使」の義郎は、「死を奪われた状態」にあり、根本的に死から遠ざかったところに存在している。なおかつ、日本の「鎖国」は、国内での外国語（カタカナ語）の使用までをも禁じ、「汚染」は、食生活を変化させ、無名と義郎との身体的な差異を鮮明にしていく。いわば、〈老い〉るにしたがい義郎が培ってきた価値観は、環境の変化と無名とを前にして、激しく揺さぶられているようですらある。

近年では、老化現象を多面的かつ総合的に研究するジェロントロジーの評価が、日本でも進んでいる。そのなかで文学は、学術的な見地を得るための情報のひとつとしてしばしば利用される。[5] 老化を多角的に分析するうえでも、義郎から読み取れるような〈老い〉への注目は、有効な観点になるはずだ。翻ってそれは、多和田葉子自身が「未来小説じゃない」とし、現在の高齢化社会と連接するという「献灯使」を、あらためて問い直す契機にもなろう。そこでまずは、「献灯使」の物語世界について整理し、現実的な社会状況とのつながりを検討するところから始めたい。

二、「献灯使」の物語世界

「献灯使」は、末部を除いて、朝から無名の通う小学校での授業中までの時間を大枠としつつ、そこに登場人物の回想や思考が挿入されていく。特に、義郎の回想では、物語の現在時において彼らをめぐる環境・状況が、過去と対比的に表されている。「放射能」という言葉は一切使用されず、「汚染」の原因等もまったく語られない「献灯使」では、それ以前と以後との相違が、義郎らを介して前景化されていくのである。

「汚染」以前と以後とを内包する「献灯使」の物語世界は、日本の「鎖国」化から、数十年が経っていると想定される。明確な経年は断定できないものの、「献灯使」では、「英語を習わなくなった世代が「made in Japan」の「made」を自分なりに解釈した結果」、自社製品の靴の中に「「岩手まで」と毛筆で」記したり、「インターネットがなくなった日を祝う「御婦裸淫の日」」ができたりと、言葉をめぐる状況にも大きな変化がある。これらのようなユーモアの溢れた言語感覚は、「献灯使」という小説の魅力であると同時に、「汚染」後の時間経過が、世代間の教育・認識の格差をともなうレベルにまで達していること

を意味してもいよう。「汚染」は、すでに過ぎ去った、一時的な過去の出来事なのではなく、物語内の現在時を生きる義郎と無名とに進行中の事態である。だから、義郎は、物語内現在における環境・認識の変化を、自らが生きてきた「汚染」以前の過去とたびたび対照させるのであろう。

曾秋桂は、このような「献灯使」の物語世界を、「厳しい放射性物質汚染に対応する人間を含む環境変化を物語っている」「「不死の島」の延長で」あるとし、「厳しい放射性物質汚染という現実の中で、それに適応するしかない人間社会の変容が、象徴的な形で語られていると言えよう」[6]と指摘した。「不死の島」（『それでも三月は、また』講談社、平成二四・二）は、「献灯使」の二年前に発表され、東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故との影響が、かなり直接的に表された作品である。両作は、同様の設定が採られ、どちらも確かに「現実」に「適応するしかない人間社会の変容」が描かれてもいるため、「献灯使」を「不死の島」の延長」と読むことはできるだろう。多和田葉子自身にも、両作のつがなりを示唆する発言[7]は見られる。ただし、「献灯使」では、震災や原発事故（放射能汚染）を直接的に示す言葉が周到に避けられている。したがって、東日本大震災と福島第一原子力発電所の事故とに限定されるのではなく、これらを含む（あるいは起点とする）さまざまな「災害」「汚染」が、「献灯使」の射程には収められてこよう。

なかでも「汚染」は、日本を「鎖国」と化し、海外との国交を断絶させるだけではなく、「この国ではもうかなり前から野生動物を目にすることはなくなっていた」と語られているように、生態系にも大きな影響を与えている。その結果、義郎は、食物に対して細心の注意を払うことになる。無名に食べさせられるものは限られており、特に魚介や野菜などには「汚染」の記憶がつきまとう。別居中の義郎の妻である鞠華が二人のもとを訪れた際に食べられる鍋では、「いつもなら食べないエビが鍋からあがる度に、マイタケがあがる度に、不吉な汚染の記憶を振り払って、義郎と鞠華は楽しい思い出を網ですくいあげ」ながら食事を楽しもうとする。販売されているものを買って来ているのだから、「汚染」はほとんどありえないかもしれないが、二人の「不吉な汚染の記憶」は決して拭い去れてはいない。「汚染」は、物理的な現象としてあるのみならず、「記憶」として彼らに深く根差し、その行動に負荷をもたらしているのである。

また、「汚染」の影響は、食生活とともに居住環境にも色濃く表れている。義郎と無名とは、質素な仮設住宅で「避難生活を送っている」とされている。二人を見た鞠華は、「義郎もこ

の家がかなり気に入っていることが話しているうちにわかってきた」と実感しているが、むしろ、仮設住宅の建設と都内の様子とは、より深刻な状況を物語っていよう。

仮設住宅の増加が目立つのは多摩地区から長野にかけての地域で、これから中山道沿いに京都まで帯状にじわじわと人口が増えていくことが予想されている。都心にはもう人が住んでいない。国会議事堂や最高裁が引越ししたという話は耳にしないが、かつての建物がもう使われていないことは確かだった。空洞である。

「献灯使」では、「汚染」の影響によって、「一等地も含め東京二十三区全体が、「長く住んでいると複合的な危険にさらされる地区」に指定され」ている。「もう何年も足を踏み入れたことのない新宿の町は今どうなっているのだろう」と義郎が想像する場面もあるように、居住者のいなくなった都心には、人口の「空洞」化が起きているのである。ここには、過疎化が進む地方と移住者が増加し続ける東京という現実とは、一変した世界が描出されているともいえよう。

しかも、人口の推移に関しては、沖縄への移住者が増加しているとされている。「本州は季候が乱暴で気まぐれな性格になったせいで農業がやりにくく」なり、人々は、「干ばつや暴風豪雨に追い立てられるようにして、本州から沖縄へたくさんの男女が移住した」。環境の変化は、季節にまで及ぶ極めて大規模なものであるのがうかがえる。それが関東から関西にかけて広がっているがゆえに、農作物が豊かで「汚染」の影響を受けにくい沖縄へと移住者が集中しているのである。

だが、この移住も無制限に行われているわけではない。物語内では、すでに「北海道は移民を受け入れない政策をとっている」。対して沖縄は、当初は「移民を無制限に受け入れる方針だったが、男性労働者だけが増えるのを恐れ」、「沖縄の農場で働きたい人は夫婦で申請しなければ採用されないことになった」。「農園以外の仕事はほとんどないので、農場への就職が決まっていなければ移住許可はもらえ」ず、しかも、「保育園や児童預かり所が不足しているので、十二歳以下の子供を連れて移住したいという夫婦は採用されないが、子供がいてもその子を親戚等に預けてくるならば移住許可が下り」、「子供が生まれると困るので、女性の場合は五十五歳以上、男性の場合はすでに去勢手術を受けている人が優先され」るというように、人口管理までもが行われているのである。

最初に述べたように、「献灯使」発表以後の現在の日本においても人口減少は、あいかわらず、改善を要するが避けられない社会問題となっている。子どもの出生による人口増加は、望むべき未来だ。たとえば、総務省統計局による平成三〇年公開のデータ[8]（平成二八年度調査）によれば、現在の日本で合計特殊出生率がもっとも高いのは、沖縄の一・九五である。一方、東京の合計特殊出生率は、一・二四と国内でもっとも低い。現実の東京の人口は、移住者によってまかなわれている部分が大きいわけだが、「献灯使」では、「汚染」のため、東京の「空洞」化が進み、多くの人々が沖縄に移動していく。同データで沖縄の転入率（五年前の常在地が他県の者の割合）は、一・七一と国内一二位であり、全国的に見ても決して低くはない。とはいえ、東京の転入率三・〇三（国内一位）と比べれば、その差は歴然である。

「献灯使」の東京と沖縄とは、現実が逆転されているかのようだ。だが、東京の「空洞」化は、「汚染」の現状を強調し、それによる人口の推移が、移動を中心としたものであることを意味する。「死を奪われた」義郎らとは異なり、無名世代は、長生きを予感させる身体の状態にはない。確実に人口減少を辿って行かざるをえないという状況において、「献灯使」は現代日本の状況と相似形をなしてもいるのである。現実的には、合計特殊出生率がもっとも高い沖縄は、物語内では移住者の出産が認められていない。無名世代の状況と、この子どもが生めないという事態とを勘案すれば、これは、現実の少子高齢化よりも、はるかに深刻であろう。物語内の沖縄では、子どもや女性の年齢が細かに設定され、「去勢手術」という非人道的な処置までもが挙げられ、人口増加を目指さない管理がなされる。国は、そういった施策にどのような関与をしているのかまったくわからず、ひたすら閉塞的な状況を等閑視しているかのようですらある。問題は、日本の少子高齢化との重なりだけに留まるものではない。すなわち、「献灯使」の物語世界は、出生率が低下し続け、人口減少の一途を突き進むという、おそらく今後も好転は望めないだろう日本の国家的な課題を、戯画化しているとも読めるだろう。

現実の東京にせよ、「献灯使」の沖縄にせよ、移住にともなう局地的な人口増は、人口減少の本質的な解決にはならない。「汚染」による世界からの孤立は、状況が改善される望みすらも見えない。そのなかでも、義郎や無名らはたくましく生きている。そこに、彼らの身体や認識をめぐる問題が深く関わってくると考えられるのである。

三、身体と認識

物語内では、義郎や無名の身体と、「汚染」の影響とは、極めて暗示的である。一切、直接的なつながりは語られていない。よって、「百八歳の誕生日をどう祝うかについて具体的に計画を練る気にはなれなかった」という、物語内で一〇七歳になっている義郎が、いつから「死を奪われた状態」になったのかも定かではない。

また、義郎のような「老人」世代もすべてが一様ではない。一〇〇歳を越えて初めて「老人」と呼ばれ、以下の世代は、「中年の老人」「若い老人」とされる。「老人」といっても、七〇代から一〇〇歳までの三〇年という年齢の開きは大きい。義郎が通うパン屋の従業員は、一〇〇歳を超えており、「小柄で身体の動きがイタチのように速い」。しかも、そのパン屋の主人によれば、「百歳を越えると休憩の必要はなくなるんだと本人は言って」いるという。「若い老人であるパン屋は、「若い」とか「中年の」という形容帽子を被らない正真正銘の「老人」である義郎の顔を羨ましそうに眺め」ている。一〇〇歳を超え、健全な身体をもつ「老人」は、現実と同じく憧れの対象である。

「六十代の若者が定年退職する時代があったのが不思議です」とパン屋の主人が話しているように、「献灯使」において、六〇代はまだ若い。義郎の娘である天南と彼女の婿も、「六十代の若々しい筋肉」のもち主とされ、しかも沖縄の農園で働いている。少なくとも六〇代以上が、「死を奪われた」状態にあるのだろう。ともあれ、彼らのような「老人」は、労働面と消費面とで、社会を構成し存続させる中心的な存在になっている。前節で論じた内容をふまえれば、現状の改善が望みがたい世界のなかで、若い世代の増加を諦め、「老人」を労働人口に再編せざるをえないような価値の見直しが、「献灯使」からは読み取れるともいえるだろう。

一方、無名は、「歯がもろいので、パンは液体に浸さなければ食べられない」「ジュースならば十五分くらいあれば飲める。とは言うものの「飲む」という行為も無名にとっては楽ではない」など、食事にすらも困難がともなう。さらには、座ることや歩くことも同様であり、義郎からすれば「一歩一歩が労働」なのである。そのうえ、義郎から見た無名は、「「苦しむ」という言葉の意味が理解できないようで、咳が出れば咳をし、食べ物が食道を上昇してくれば吐くだけだった」「それが無名の世代の授かった宝物なのかもしれない。無名は自分を可哀想だと

思う気持ちを知らない」ともされている。無名と自らとの差異を測り、それを価値あるものとして汲み取ろうとする義郎の姿が浮かび上がる。同時に義郎は、身体をめぐる事柄に苦労や困難のともなう「可哀想」な「子供」として無名を捉えてもいる。しかし、これらは、あくまでも義郎から見た無名の姿である。

無名から見た義郎は、「曾おじいちゃんは眉毛が濃くて顎が張っていて強そうに見えるけれど、実はすごく傷つきやすくて、すぐ泣きそうになる。なぜか僕のことを可哀想だと思っている」と語られている。義郎が無名のことを「可哀想」と考える理由は、無名には理解できない。そこには、やはり身体の差異が介在していよう。食生活や運動能力の差異は、「僕と曾おじいちゃんは動物図鑑の同じページに載せてもらえないかもしれない」「僕らの身体とあまりにも違いすぎる」とまで、無名に思わせていく。義郎のほうは、「自分たち老人と今時の子供たちとは正反対で、決して病気にならず、何も考えないで朝から晩まで働ける頑丈で神経の太い別の哺乳類なのだ、と自己暗示をかけ続け」ている。

このように、一面的な解釈に終始するのではなく、義郎と無名と双方の立場から語られている点は、「献灯使」の構造上の特徴であろう。多和田葉子は、「一人の視点から書いている小説ではなくて、視点の転換があります。無名と義郎は助け合い、しっかりつながってはいるけれども、二人のものの見方が一致しているわけではない」とし、無名の「自分なりの見方を伸び伸び発展させていく感じ」に「むしろ共感できるところ」もあり、「そこに希望があるかもしれませんね」[9]と述べている。多和田のいう「視点の転換」によって鮮明になる、義郎と無名との認識や価値観の相違は、多様な解釈を呼び込む。彼らだけでなく、義郎の妻の鞠華と、無名の小学校の教員である夜那谷にも「視点の転換」は起こり、やはり両者の認識の相違は明らかとなる。

「優秀な子供を選び出して使者として海外に送り出す極秘の民間プロジェクト」である〈献灯使〉に関わる鞠華は、「頭の回転が速くても、それを自分のためだけに使おうとする子は失格」など、それにふさわしい条件を「失格」という文脈でいくつも挙げ、無名を「完璧な適任者」と考えていた。物語内で自在な感性を表していく無名は、すべての「失格」を乗り越えていく存在であろう。そのような無名に、義郎は「不思議な知恵」「新種の知恵」を見ている。これに関して岩川ありさは、「義郎が感じている無名の世代の知恵は、かつての世代の人々が忌避していた遅さや弱さが、人間生活の喜びだと感じる力だ」とし、

また、「矛盾したり、異なった事柄だと通常では思われる資質が、同時に現象していることを使者の条件にしていることには変わりない」という、鞠華が挙げた〈献灯使〉のための「資質こそ、「不思議な知恵」なのだ」[10]と指摘した。

義郎が「不思議」「新種」と捉えねばならない、そして鞠華が「失格」という否定の論理でなければ示せない、そういった無名の能力は、「老人」らの価値観に到底収まるものではない。多和田の発言とともに、岩川の論及は示唆的である。最終的に〈献灯使〉に選ばれ、海外に送られる無名に、多和田のいうような「希望」を見出そうとすれば、彼の資質である「不思議な知恵」こそ、それに値しよう。

ただし、「視点の転換」が繰り返される小説であるがゆえに、義郎や鞠華ら「老人」の認識も見逃しがたいのである。互いを別種の生物と位置付けるかのような解釈において、義郎と無名とは一致していた。しかし、そこにいたるプロセスは、「自己暗示をかけ続け」なければならない義郎と、無名とではやはり異なるといわざるをえない。ただし、義郎は、無名をまったく理解できていない、あるいは理解しようとしないのではない。「宝物」という言葉が用いられていたように、義郎は、自らと無名との相違を好意的に解釈しようとしていた。また、孫である飛藻のことを振り返った義郎は、「子孫に財産や知恵を与えてやろうなどというのは自分の傲慢にすぎなかった」と思い直し、「今できることは、曾孫といっしょに生きることだけだった。そのためにはしなやかな頭と身体が必要だ。これまで百年以上も正しいと信じていたことをも疑えるような勇気を持たなければいけない」と考え方をあらため、「実は自分は「老人」ではなく、百歳の境界線を越えた時点から歩き始めた新人類なのだと思って義郎は何度も拳骨を握りなおした」のである。

新しい時代と価値観とに応じた認識の変化のために、「しなやかな頭と身体」が求められる。きっかけは飛藻や社会の変化であったとしても、「今」の義郎にとっては、いわば無名を理解し、ともに生活するために必要なものが、「しなやかな頭と身体」なのだ。その身体と認識とに絡めて義郎は、「「老人」ではなく、百歳の境界線を越えた時点から歩き始めた新人類なのだ」と、自身を定位し直そうとしている。それは、「何度も拳骨を握りなお」さなければならないほどに、困難なことでもあるのだろう。「自己暗示をかけ続ける」過程と同じである。

義郎は、自らと無名との違いを、悩み苦しみながら、身体を介して繰り返し推し量っている。ここには、身体とその認識との摩擦が、鮮明に描き出されているといえるだろう。一〇〇年

以上をかけて培われた価値観でさえも転換せざるをえないということを、義郎は簡単にはできない。そこには、苦悩や困難がともなうのだ。

鞠華も、義郎と変わらないだろう。無名を〈献灯使〉の「完璧な適任者」と確信するも、彼女は、「無名に危険な使命は負わせたくない。このままいつまでも義郎に守られて平穏な毎日を戦い抜いてほしい」と願い、「自分さえ黙っていれば、無名は審査委員会に発見されずにすむだろう」とまで思っている。実際に、無名を〈献灯使〉に勧誘したのは夜那谷だった。無名を〈献灯使〉にふさわしい存在として見詰め続けた夜那谷と、曾祖母としての感情を捨て切れない鞠華との差異は甚だしい。日本や世界の未来よりも、曾孫の安全と成長とを願う曾祖母を否定はできまい。

柔軟性に富む思考と価値観とを見せ続ける無名は、「アメリカ大陸が右半身、ユーラシア大陸が左半身だ。腹にオーストラリアを感じる」と、日本を中心に描かれた、メルカトル図法であろう「大きな世界地図」と自身との重なりを感得する。「鎖国」化によって外交の閉ざされた日本にあって、世界と自己とのつながりを暗示するこの場面は、日本から海外に送られる〈献灯使〉にふさわしいイメージの構築でもあろう。そのあと意識を失い、八年の歳月が経ち一五歳になった無名は、夜那谷に推薦された〈献灯使〉を承諾する。「生まれた時の性が持続することはなく、誰でも人生のうち必ず一度か二度は性の転換が起こるようになった」と物語世界のなかで、無名も、一五歳になるうちに女性化したと思しい兆候を示す。ほかにも無名は、近眼が進み、呼吸器には「頼りなさを感じる」ようになり、車椅子で外出し、「声帯ではなく、腕時計から声が出」るようになっている。すべて、あまりにも大きな身体上の変化だ。

このような無名の立場から、「百十五歳になった義郎の身体はまだまだ丈夫」であり、「相変わらず可哀想なのは老人たちだった」と語られているのである。義郎が、「なぜ休みなく働くのかと言えば、何もしないでいると涙がとまらないからだった」。無名からすれば、「涙がとまらない」義郎は、「可哀想」な「老人」である。「髪の毛が色を失い、みるみるうちに銀色に光り始めた」無名は、「二人で銀色同盟を結ぼう」と義郎にもち掛ける。無名は、苦痛も、自らの身体上の変化もまったく悲観しない。「曾おじいちゃんだってもう五十年以上も銀色の髪の毛で元気に暮らしてきたんだから、僕だってこれから五十年以上、元気でいられるよ」と、義郎を思いやりつつ、互いの関係性をより強固にするような提案をしているのである。これ

により、「義郎の涙は奇跡のようにとまって、目元に銀色の微笑みが浮かんだ」のだから、無名の性質は、やはり「希望」を予感させるものだろう。

だが、義郎にとって、〈献灯使〉になるという無名の選択は受け入れられるものだったのだろうか。「僕だってこれから五十年以上、元気でいられるよ」という言葉が、義郎の涙を「奇跡のように」止めたのだ。無名が、元気に長く生きることこそ、義郎の願望である。〈献灯使〉にふさわしい無名のイメージが作り上げられていく一方で、〈老い〉にともない、身体をめぐる認識を変えざるをえないことを理解しながらも、最後まで、自らが培った価値観のすべてを捨て切れない義郎がいる。「視点の転換」の繰り返しから生じる、他者間の認識の差異によって、「献灯使」は、一義的な結論への帰着を回避し、多様性に富む解釈を呼び込む物語になっている。「希望」としての無名も、義郎や鞠華と、夜那谷とでは意味が異なっていよう。

四、〈献灯使〉という試み

顧みれば、一五歳になった無名は、横たわった際にかかる重力や、砂浜の感触、海水の臭いなど、最後まで身体的な感覚を味わおうとしていた。旧来的な身体感覚は、無名においても、決して否定されているわけではない。「闇に脳味噌をごっそりつかまれ、無名は真っ暗な海峡の深みに落ちていった」という「献灯使」の結末は、実体的な身体の喪失を表していよう。あるのは「真っ暗な海峡の深み」なのだから、灯もない。「五十年以上、元気でいられるよ」という無名の言葉は、まったく異なる価値へと転換された。無名は、「希望」をつなぐ存在には違いないだろうが、義郎や鞠華の認識からすれば、彼の処遇は人身御供に等しいのではないか。その意味で、〈献灯使〉は、人々の「希望」という灯に献ぜられる使いである。

無名を思い続け、残された義郎の心の内を想像するとき、「希望」の解釈も変わるだろう。つまり、「献灯使」からは、世界や環境、身体や認識の変化への対応を余儀なくされるなかにあって、どうしても手放しがたいものの価値を、「希望」として読み取ることもできるのである。「死を奪われた」「死ねない身体」によって生き続けなければならないという〈老い〉の苦しみと悲しみをとおして、それが描かれている。

「献灯使」の結末、義郎や無名らの身体と認識には、言葉の問題も関わっていると考えられる。たとえば、外来語の未使用から生み出された「岩手まで」や「御婦裸淫の日」のような言

語遊戯的な言説は、小説の語りのみならず、義郎や無名らの発話にも見られる。「乳歯」を「入試」へと意味の変換をしたり、「「トイレ」の「イレ」に、「入れ」を聞き取り、出す場所なのに入れるという言葉の矛盾を感じ」たりする無名の思考など、登場人物と言葉との関連性は高い。

無名にとって義郎は、「曾おじいちゃんは、死んだ言葉、使われない言葉も全部頭の中に入っている」「使わない言葉をたくさん脳の引き出しにしまっていて、捨てようとしない」人物でもある。そもそも「鎖国」政策に批判的であり、価値観のすべてを転換し切れない義郎は、たびたび外来語を口にしていた。また、教員である夜那谷は、「子供たちが言葉を耕し、言葉を拾い、言葉を刈り取り、言葉を食べて、肥ってくれることを願っている」という。言語遊戯的な感性にも長けた無名は、まさに言葉を摂取して成長する子どものあるべき姿であり、夜那谷の願いを体現する存在でもある。物語内では、南アフリカとインドが「言語を輸出して経済を潤し」てもいる。義郎が捨て切れず、子どもの成長を促し、国の経済をも潤す言葉は、豊かさの象徴でもあろう。

にもかかわらず、小説の冒頭付近では、「言葉の寿命はどんどん短くなっていく」と語られている。「鎖国」によって外来語が使用されなくなっただけでなく、「古くさいというスタンプを押されて次々消えていく言葉の中には後継者がない言葉もある」ともいう。「迷惑は死語」であり、「アリガトウって言葉」も「もう死んでる」とされるなかで、子どもたちが叫ぶ「かんしゃあああああ」という「最近の流行語」も、瞬く間に寿命が尽きるのだろう。意味の剥奪された音だけの響きが消費されていくようだ。そういった言葉の寿命が短いのは、現実でも大差ない。いずれにせよ、「言葉の寿命はどんどん短くなっていく」と最初に語られ、無名らの世代（子ども）の寿命も長くはない（短い）だろうと推測される。言葉と子どもとに係る寿命の短さは、豊かさに反する社会の乏しさにほかなるまい。

だからといって、無名に抱かれる「希望」のイメージが色褪せるわけではない。だが同時に、〈老い〉てなお「死ねない身体」となり残される側の物語も、そこには内在していた。「死を奪われた」と表現される義郎や鞠華ら「老人」は、言葉も価値観も捨て切れず、乏しいといわざるをえない社会のなかで、苦痛と悲哀とを噛み締めつつ生きていくのだろう。彼らの身体と認識とをめぐる価値観もまた、無名のそれと同様に見直されるべきである。

義郎が過去に執筆した、歴史小説「遣唐使」は、外国の地名

を多用したために公表にはいたらなかったが、「燃やすのがつらいので」、「敬意を持って別れたいものを誰もが自由に埋めることができる」という「モノノ墓地」に埋められた。特使という点において、一般的な遣唐使と〈献灯使〉とは、意味を同じくする。しかし、歴史小説「遣唐使」は、埋葬されて残るものであり、〈献灯使〉は、未来に託され変わるものである。物語を結末まで読み進めたとき、対極的ともいうべき「遣唐使」と〈献灯使〉というふたつの言葉が反響し合う。無名が後者を選択したように、義郎は前者のようなあり方を選んだのである。

義郎からすれば、〈献灯使〉という試みを、希望や期待をもって受け入れることは難しいだろう。多和田葉子「献灯使」は、義郎が抱くような〈老い〉の悲哀といかに向き合うかという問いを、読者に喚起する物語にもなっている。身体をめぐる認識の変化にともなう痛みは、あまりに大きい。少子高齢化による人口減少を突き進む、現代の日本社会にあって、「死を奪われた」義郎と〈献灯使〉になる無名、両者の姿は痛烈な批評となりうるだろう。

注

（1）たとえば、小野正嗣の書評「言葉への感受性を取り戻せ―多和田葉子著『献灯使』（講談社）を読む」（『図書新聞』平成二七・一・一〇）では、次のような紹介がなされている。

ディストピア小説の傑作として絶賛された表題作「献灯使」が素晴らしいのは、作家の想像力が、震災以降の日本の「いま」に混じり込んだ不安と毒の種子を、時間を早回しするように発芽させてみせたからだけではない。不気味な未来図を言葉と人間とのいわば身体的な関係の問題として描いているからでもある。

同時に、小野は、「『献灯使』のディストピアは、すでに我々の「現実」である」とも述べており、極めて「現実」的な、喫緊の問題として、この小説を読んでいる。

（2）多和田葉子・ロバート　キャンベル対談「やがて〝希望〟は戻る―旅立つ『献灯使』たち」（『群像』平成二七・一）

（3）鈴木斌「〈老い〉の発見」（尾形明子／長谷川啓編『老いの愉楽―「老人文学」の魅力』東京堂出版、平成二〇・九）

（4）天野正子『老いの近代』（岩波書店、平成一一・二）

（5）ロバート・C・アッチェリー／アマンダ・S・バルシュ／宮内康二訳『ジェロントロジー―加齢の価値と社会の力学―』（株式会社きんざい、平成一七・六）では、「ジェロントロジー」について、次のように説かれている。

ジェロントロジーとは「エイジングを理解するために必要な根拠を持つこと」である。その根拠とは「現実に限りなく近い正しさ」である。エイジングのメカニズムを理解し、対策を検討するためにはあらゆる資源を活用しなければならない。このためには様々な学問や実践からの照査を統合する必要がある。

また、「文学」等の芸術領域の利用に関して、以下のような分析が挙

げられている。

音楽以外にも、例えば美術には、醜い老い、賢明な老い、死を超越した老いなど、さまざまなエイジングが描写されているし（Winkler1992）、晩年に詠われた詩のなかには人生の本質を表現するものが多く見られる。いずれも、作者本人に限らず鑑賞する我々に対し年齢を重ねることの意味や生きることの意義を示唆する作品である。

（6）曾秋桂「エコクリティシズムから見た多和田葉子の書くことの「倫理」―「不死の島」と「献灯使」との連続性・断絶性―」（「比較文学研究」平成二九・二二）

（7）多和田葉子『「献灯使」をめぐって』（「本」平成二六・一一）では、平成二五年に被災地を巡ったあと、「短編「不死の島」を展開させて長編小説を書くつもりだったわたしは、この旅をきっかけに立ち位置が少し変わり、その結果、『献灯使』という自分でも意外な作品ができあがった」と述べられている。なお、「「献灯使」をめぐって」は「現代ビジネス」（平成二六・一一・一五　https://gendai.ismedia.jp/articles/-/40935）の記事にも掲載されている。

（8）法務省統計局「社会生活統計指標」（「統計でみる都道府県のすがた2018」法務省統計局ホームページ、http://www.stat.go.jp/data/k-sugata/index.html　平成三〇・二公開）

（9）（2）に同じ。

（10）岩川ありさ「変わり身せよ、無名のもの―多和田葉子「献灯使」論」（「すばる」平成三〇・四）

＊本稿における多和田葉子「献灯使」の引用は、すべて初出（「群像」平成二六・八）に拠る。